



Title	懷德堂関係研究文献提要（二）
Author(s)	
Citation	懷德. 1984, 53, p. 85-88
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90632
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

そさう／＼しけれ、又いつか／＼りくめるなど、すべて

折にふれ事にのそみて、なが／＼しううつくしうかぎく

つさせたまおほん／＼みともの、車にものせつへうなり

たるを、櫃におさめておほんがたみに見奉らんとする

を、其すき間より虫のはひ出たるをいふかり、ひらきみ

れ／＼すへてミなしミのすミ家となれりける、紙のあたら

しきつよかるあらみ出し、よひ／＼やわらかなるほそな

りにきりて、紙繩につくりて、母しろの君に奉らんと

す、さておもふに十せかほとのこのかた、したしきう

ときうせたる人いくそはくそ、むつかしくもつれたる事

の、いてくめるいくたひそ、いまいそかしはうしと恨み、

くるしとかなしみ給ふらん、むべ世におひさぬ事よとお

もひ、又おもひの外のさちある時ハ、きこへあけて、か

の歎をうけ引てとおもふ心もいてきて、ものゝかなしき

うれしきは世にあらはとそもふ

ひのとのうしのとし

五月廿日

誠之

誠之 記

（4）論文・田中佩刀「中井竹山と「東征稿」」（明治

大学教養論集』51・昭和四十四年）

本論文は、中井竹山の漢詩集「東征稿」の日本漢文学史上における意義を認め、論者自身の実地調査と細井平洲の評語とに基づきつつ、多数の佳作を紹介し、その内容を考察したものである。

「東征稿」は、竹山の江戸への旅の途上における感慨よりも詩篇が、日記風にまとめられ詩集の体裁を成したものであり、帰途の有様を散文で綴った「西上記」と合せて、『東西遊記』として刊行されたものである。「東征稿」における竹山の旅は、決して公務に束縛された窮屈な旅ではなく、当時の文人の尚古趣味的な旅行と何ら異なることのない自由な楽しい旅であったと思われる。その裏付けともなる「東征稿」の特色の一つとしては、題詞や註に散見される竹山の文学・歴史・地理などに関する該博な知識があげられる。その内容も、林羅山「丙辰紀行」などと比べ何ら遜色がない。この文学や歴史などに対する造詣の深さが、余情あり時として軽妙な竹山の詩の骨格を形成していることは注目に値する。また、「東征稿」は、意図的に構成されたものではなく、竹山自身の旅が自らその体裁を成したものである。にもかかわらず俳諧の如き展開を有している点で、極めて魅力的な漢詩集であると言えよう。

（5）論文・田中佩刀「中井竹山と「東征稿」」（明治

竹山は、徂徠が華音に通することを文章の第一義としたことに反対の意志を示している。一時隆盛を極めた古文辞学派も竹山の時代に至るまでには衰退の兆しを見せ始めていた。古文辞学派は、和臭を嫌い、中華の言語により自らを制約することによって自らが中国文学の模倣者・亜流とならざるを得なくなつた時、必然的に崩壊する危険性を孕んでいたのである。竹山の活躍した時代は正しく反古文辞学の風潮が昂揚しつつあった時代であった。竹山は時代の趨勢を受けて日本文化に融合する日本人の漢詩文を指向したと言うことができよう。「東征稿」の詩篇も、古文辞学派の見地からすれば完璧とは言い難いかもしない。しかし日本近世の漢文学史上にそれを置いて見た時、竹山の「東征稿」は正に日本人の漢詩として看過することのできない意義を有しているのである。

(5) 論文・平重道「懷德堂学の発展(I)」(『宮城教育大学紀要』3・昭和四十四年)

本論文は、教育機関としての懷德堂の意義を十分に評価した上で、懷德堂に関連した各思想家に懷德堂学とでも称すべき一貫した学風が存在したこと認め、その成立と發展とについて考察を加えたものである。(1)懷德堂学に関するこれまでの学績、(2)懷德堂書院の成立とその盛衰、(3)初期懷德堂の学風、(4)富永仲基の學問と思想、以上四節より成る。

(5)西村天囚『懷德堂考』を最重要の参考文献として評価する

ほか、幸田成友編『大阪市史』卷一、岩橋小弥太『懷德堂書院』など、堂学に関する先人の業績を多數紹介する。

(1)懷德堂の成立とその盛衰とについて、主に三宅家と中井家・学主と預人との関係を通して考察を加える。三宅家の持つ町人的な自由・妥協・好事の学風は官許学問所となつた懷德堂の官学的な性格とは合致しない。その結果、權威主義的な竹山の独裁に転換を迫られたのである。また、その衰退の原因としては、傑出した指導者の不在を第一にあげるべきであるが、それに加えて財政の破綻・学主寒泉と預人桐園との関係などをも考慮に入れるべきであろう。

(2)懷德堂の学風は、石庵・龜庵・春樓の初期創立時代、竹山・履軒・碩果の中期隆昌時代、寒泉・桐園の後期漸衰時代に三分し得る。初期の学風の特色としては、実践主義と教養主義との二点をあげるべきであろう。石庵は、学問は孝悌を中心とする人倫道德の実践であると考えた。龜庵においても、実践主義が道徳から経世へと拡大し実学主義的色彩を帯びて来るという変化はあるが、その主眼はなお常識的な実徳主義にあつた。この道徳的な実践主義は、町人の実利・実用の精神を満たすものである。また、石庵らは、漢学のみの素養に止らず、謡曲・書・俳諧など幅広い教養を身につけていた。この教養主義は、町人の自由・享樂の精神を満たすものである。これらの学風に基づく実利・平明・自由を重んずる懷德堂の教化精神は、町人の学問的関心を喚起するため大なる効果を納めたのである。

(3)初期懷德堂を代表する学者としては、富永仲基と五井蘭州とがあげられる。蘭州が龜庵の特權的な官学主義を継承してい

るのに対し、仲基は石庵の町的な私学主義を継承している。石庵の自由討究・一説に固執しない柔軟な学風を継承した仲基は、儒教から仏神へとその研究を進め、儒仏神を批判しつつその中より三教を一貫する独自の思想を構築するに至った。その思想の骨髓とでも称すべきものが『翁の文』であり、それを通じて仲基が主張したものは、誠の道の観念であった。儒仏神の三教には、現実生活には決して適合しない不純物が混入されている。これに対し、誠の道は、現実生活を肯定する所に成立し人間生活の調和を第一義とする簡直平明な教道なのである。仲基の誠の道は、必ずしも新奇なものではない。しかし、三教に対し加上法という容観的な歴史実証主義的研究方法で鋭利な批判を開いたという点においては、不朽の功績が存すると言わねばならない。

(6)論文・平重道「懐徳堂学の発展(II)」(『宮城教育大学紀要』5・昭和四十六年)

本論文は、「懐徳堂学の発展(一)」の続篇である。(5)五井蘭州の學問と思想、(6)中期懐徳堂の學風と中井竹山、(7)中井履軒の學問と思想、以上三節より成る。

(5)五井蘭州は、父持軒の學問を継承しつつ、かつ石庵の思想をも暗黙裏に継承している。石庵が諸学折衷の傾向を有していたのとは異なり、持軒は朱子学尊信の態度を崩すことがなかつた。これは、石庵においては諸学派を止揚し原義を把握せんとした。

する自由な批判主義となつて現れ、持軒においては宋学を通じて矛盾を修正せんとする修正主義となつて現れている。持軒の学を継承した蘭州が朱子学に學問的根拠を求めたことは言うまでもない。これによつて從来の懐徳堂の曖昧な学風は刷新され、西洋の科学思想を思われるが如き合理主義的精神を導入している点である。これによつて懐徳堂の現実的な学風は合理主義という根拠を得たのである。また、蘭州の有してた実学思想にも注目すべきである。やがて竹山・履軒の手によって経済論として大成される蘭州の実学的傾向は、從来の堂学における個人中心の実践主義を發展させ、社会経済との接觸面を開拓したのである。

(6)中期懐徳堂を代表する学者は、言うまでもなく中井竹山と中井履軒である。履軒が隠逸的な性格で研經尊重の学風を有していたのに対し、竹山は世俗的な性格でその学風も甚だ実学的であったと言える。竹山の学問の特色は、異端攻駁とその実学思想とがあったと言える。竹山が異端として徹底的に攻撃を加えたものは、仏教と譲園学である。竹山の排仏論は、仏教の邪説が民心を惑乱させ社会争乱の因となる点、及び仏寺經營に莫大な費用を要し國力消耗の因となる点などの社会的弊害に力点を置きつつ、それを防止するための政策論にまで言及している。徂徠攻駁においては、蘭州の攻駁が經学に集中したのとは異なる

り、経学・詩文・正名の三方面から徂徠学の大害を天下に叱呼したという点に特色が認められる。これらの攻撃は、おおかた宋学に依拠している。竹山の宋学の特色は、程朱の根本思想を離脱することは慎まねばならないが、その経説の本旨を発明することは自由であるとする点にある。しかし、この思想と経説との分立論には、経説の自由討究を徹底すればやがて一種の思想的立場が生じ程朱を離脱してしまうという危険性があったと言える。それは、やがてより沈潜的な履軒の経解において明らかとなるのである。竹山の実学思想の性格は、封建社会と町人勢力の勃興についての見解を考察することにより明瞭となる。竹山は、徳川封建制を最善の政治形態と考え、現実肯定の立場からの封建制への帰順を指向していた。町人の富力・商工業の必要性を認める実利論・自由商業論などは全て、封建制の枠組を離脱することを目的としたものではなかったのである。

(七)履軒の学問の中心は研經である。とりわけ精力を注いだのは経史の研究においてであり、その成果は『七經逢原』などの書に顯著である。その研經の特質は、孔孟の本旨を探究することを目的としたため、程朱の学説であっても時としてそれを排除する姿勢を有していた点にある。研經は注釈を墨守することではなく、經典の本義を発明することなのであった。履軒の治經はまず經典批判より始まる。その結果、『論語』『孟子』『中庸』を尊崇し、『易・十翼』や『春秋』を孔子の筆に非ずと断するに至るのである。内容を把握する際には、隨文取意の原則により、後儒の附会と思われるものは全くこれを排除するという考証学的姿勢を示した。宋明学の批判と孔孟の古意發揚が考

証学の成立を俟つて完成するものとするならば、かくの如き履軒の古注学は、宋注の注釈学的な不備を内面的に立証し、古文辭学と考証学との間隙を埋める意義と位地とを有するものであろう。履軒の異端排斥論の特色としては、内面的な老子批判、老子・道教の両異説などがあげられる。また、その史学思想においては、史学における実証性を追求したこと、斥霸論を唱道したこととに特色を見出すことができよう。実学思想における特色としては、竹山が現実肯定の立場から封建制の範囲内ではあるが町人の存在を肯定しているのに対し、履軒は一種素朴な農村共産制を理想としている点をあげることができる。

竹山と履軒とは懷德堂最大の思想家であり学者であった。竹山の実学と履軒の経説とは共に当代に卓越し、兩者は堂学の指導者たるに止らず当代を代表する思想家であった。懷德堂の隆盛時代である。しかし、懷德堂の中心思想たる宋学は、考証学や蘭学の実証主義・合理主義的傾向に圧迫を受けて成立した修正主義的な宋学であった。懷德堂の宋学が一步進展することを望むなら、竹山・履軒の修正主義を更に克服していく必要があつたのである。

(佐藤一好)